

リウーを待ちわびて  
文学部1年 佐藤勇人

四月は最も残酷な月―四月、川内駅に降り立った私は、異様な光景に目を見張った。いつもと同じように春が訪れ、桜が咲き誇る。空は霞み、木々の梢では鳥たちが新たな季節の訪れを讃える。いつもと同じ春。しかしキャンパスはひっそりと静まり返っている。講義棟の扉は固く閉ざされ、サークル棟には人影一つ見えない。長い受験勉強の果てに待っていたのは、沈黙の春だった。

それからしばらくして、授業が始まった。目覚ましの音に目を覚まし、食事をし、そしてパソコンの画面に向かって授業の動画を見る。午後になると、再びパソコンの画面に向かい、課題と格闘する。気づけば、西日がほのかな閃光を放ちながら青葉山の向こうへと沈んでいく。そして、夜。こうした単調な日々が小さなアパートの一室でいつ果てるともなく繰り返された。故郷の景色の記憶もセピア色を帯びていく。そしてある朝鏡を覗いてみると、そこに映し出されていたのは骨ばって無表情な顔であった。眉間には皺が刻まれている。日々の循環のなかで私は力を失い、そして希望まで失いかけていたのだ。しかし、心の中で私は呼んでいた、あの「ベスト」の主人公、リウーの名を。彼のように人々の先頭に立ってこのコロナ危機という巨大な不条理に立ち向かっていく人物は、現れないのだろうか？時は流れ、木々に青葉が滴る季節になった。

ある日の昼下がり、ついにリウーがやってきた。仲間たちと共に。もちろん、彼はリウーという名前ではない。彼は富処君という理学部数学科の一年生だった。そして彼を支えるのは地球科学科の金井君と化学科の亀井君。彼らはほぼすべての一年生が履修する全学教育科目の授業・基礎ゼミを通して知り合い、プロジェクトチームを結成。コロナ禍で打ちひしがれている同級生を励まし、一致団結してこの危機を乗り越えるべく、Zoomを利用した交流会など、様々な企画を立ち上げていた。彼らは活動の幅を広げるべく、新たなメンバーを募っていたのだ。授業などを通して身に着けたコンピューターの技術を駆使して同級生たちの間をつなぎ、結束してこの非常事態に立ち向かっていこうとする彼らの姿は、もちろん感染症の予防に奔走することはないが、「ベスト」に登場するリウーとその仲間たちの姿と重なって見えた。そして私は迷うことなくプロジェクトチームに参加した。夏の深まりとともに、自らの胸に内なる火が灯るのを感じた。

富処君を中心とするチームが企画・運営に携わったイベントのなかで最大のものは、おそらく「オンライン脱出ゲーム」であっただろう。これは東北大の川内キャンパスに時限爆弾が仕掛けられたという設定の下、Zoom上で問題を解きながら爆弾のありかを見つけ、それを解除するというもので、それぞれの持ち味を生かしながらゲームの世界を作り上げていくことは、私も含めたメンバー全員にとって大きな喜びであった。企画終了後に富処君、亀井君そして金井君が浮かべた会心の笑みは私の中で今でも光輝を失っていない。かけがえのない思い出を作ってくれた理学部の三人の友人にこの場を借りて改めて

感謝したい。

季節は移ろい、東北に冬がやってきた。そして冬は我々を暖かく包み込んだ。夕方の川内キャンパス。講義棟やサークル棟の窓から暖かな光が漏れ、行きかう学生の表情は、どこまでも明るい。吹奏楽の練習の音が楽しげに響き渡る。キャンパスに日常が戻ってきたのだった。とはいえ、コロナとの闘いはまだ終わったわけではない。今年の前半のあの悪夢が再来しないともかぎらない。しかしこうした危機を前に私は決してたじろぐまい。リウーはきっと来る。いや、今度はほかならぬ私がリウーになるのだ。

私は夜空に瞬く星を眺めながら、西日のほのかな暖かさを背に感じつつ、再び歩み始める。

( 2020年12月29日 )

